

START

桜が満開に咲き、新しい出会いに心ときめかせる春。

「皆さん初めまして、天野瑞帆です。よろしくお願いします」

黒板の前に立っていた彼女を見たとき、人生で初めて——一目惚れをした。

平均よりも小柄な体形。染めていないのに自然な茶色の髪。ぱっちりとした瞳。何より笑顔が可愛い。何故か鞆にラリゴちゃんというキャラクターのキーホルダーを付けている。そんな女の子。いや、女の子なのは、当たり前やけど。俺は後輩の安川のような趣味は持ち合わせていない。「いや、僕が好きなのは女の子です!」とは言っていたけど、絶対に違う。あいつは……駄目だ、脳内で脱線した。

それはさておき、最近席替えをした。彼女の席は窓際の二列目前から三番目。俺はその斜め左後ろ。窓際で太陽の光が温かく、後ろの方なので先生の目にも付きにくく、何をしても怒られない。しかも近くで彼女を眺められる。誰もが羨む特等席だ。

そう、最近までは思っていた。だけど気付いてしまった。

——俺の視界に彼女は映るけど、彼女の視界に俺が入ることはないということ。

手を伸ばせば、すぐ届くそこに彼女がいるのに。近いような遠いような、そんな微妙な距離。

そんな悲しい事実気付くと、余計なことにも気づいてしまう。彼女は気さくで明るい性格なので友達が多い。特に男子と……。

現に今も隣の席の桃山と話している。まあ、授業のグループワークだから当然だが。先生、なんで隣と組めたわけ? おいおい、桃山、彼女に近すぎやしないか? 鼻の下伸ばすなよ。頼むから離れてくれよ!

そんな願いが通じたのか、キーンコンカンコンとタイミングよくお馴染みのチャイムが鳴った。ラッキー、ざまあみろ、桃山。

じゃあ今日の授業はおしまい。お疲れさん、という教師の言葉を言い終わる前に皆、昼食の準備をする。俺はお昼を持つてくるのが面倒なので、お昼休みは寝て過ごすのが常である。というのが表の理由。彼女に話しかける男子に牽制をかけるのが裏の理由だ。彼女に話しかけようとする度に睨んでいるので、そろそろクラスの半数は俺の気持ちに気付いているのではないか……、そんな気がしてきた。いや、隣の席の女子は気付いているだろう。

いつもの通り、机に突っ伏して寝ているような体制をとる女の席を見ている。すると、クラスのお調子者の林と桃山と彼女がチェスをして楽しんでいる。こいつらはどんなに睨んでも効果がないので、最近は無視を決め込むことにした。それでも気に入らないので、会話を集中して聞く。

「え、そこに騎士を持つてくの?」

「……まづいの?」

「キングをこっちにもつてきて……」

「う、嘘！ 包囲された！」

「クイーンでチェックメイト！ よし、僕の勝ち」

「負けちゃった。桃山君、強いね！」

「当然でしょ、こいつチェス部だもん」

「……余計なことを言わないでくれる？ 林君」

「ははは、ごめーん！」

「……一ミリも謝る気ないよね」

「てへ」

「全く可愛くない」

「あはは、面白い！」

ふわふわした笑顔。可愛過ぎる。……若干変態くさい気がするが気にしないでおう。それにしても何でチェス？ 将棋だったら俺にも出来るのに。起源はどっちも古代インドのチャトランガって言われているんだから、どっちでもいいじゃないか。……なんて脳内で文句を言ったところでどうようもないけれど。

それにしても林と桃山が恨めしい。彼女と楽しそうに話をして、普通に遊んでいる。ただでさえ隣の席と斜め前の席のあいづらは常に彼女の視界に入っているのに。……羨ましい。

俺も一緒に話したい。俺の方を向いて、俺の名前を呼んでほしい。一緒に遊びたい、笑いたい。

彼女はどんな子なんだろう。

誕生日はいつ？

何座？

何型？

何て呼ばれたい？

出身は何処？

趣味は何？

好きなことは？

特技は？

お母さん、お父さんはどんな人？

兄弟姉妹は居るの？

子供は好き？

動物は好き？

好きな食べ物は何？

嫌いな食べ物は何？

卵焼きには何をかける？

SNSはやってる？

——— 好きな人が好き？

疑問は沢山浮かんでくるのに、何一つ知らない。それは当たり前、俺は彼女と話をしたことがないのだから。恋焦がれているのに、一言話だけでも何か変わるかもしれないのに、そんな勇氣すら出ない。ただのチキンだ……。

こんなんだから彼女には名前すら知られていないかもしれない。再びちらりと彼女を見ると。

——— ぱちり。

そんな擬音が鳴りそうな勢いで目があった。若干気まずいな、と思って頭を伏せようとした時、ふわりと彼女が微笑んだ。……何ていい子なんだろう。いつまでも見ていたいと、微妙に顔をあげたまま固まってしまう。

すると彼女がこちらに向かって歩いてきて、俺の席の横で立ち止まる。

「……大畑くん」

彼女にはか細い声で俺を呼んだ。うん、と言いながら完全に顔を上げ、彼女を見る。

何の用だろう、と思っていたら、彼女はその柔らかな表情のまま話し始めた。

「私、天野瑞帆。」

数か月前に聞いた自己紹介の言葉。それが今、俺に向けられている。

彼女の意図が分からず、おう？ と微妙な返事しか出来ずにいると、ぎりぎり視界に入る桃山と林に、けらけらと笑われた。何が面白い？ と思っていたが次の瞬間、全ての疑問が解決する。

「大畑望くん、私と……友達になってくれませんか！」

思わず目を見開いた。彼女は顔を真っ赤にさせて目をつむり、答えを待っている。友達になる位でこんなに必死になれるとは。友達から。なかなか面白いかもしれない。

勇気を出してくれた彼女に贈る言葉は勿論――

終わり